

みすず野

日展安曇野展が中止になった。安曇野文化財団をはじめ、誘致と準備に奔走された関係者の落胆はいかばかりか。日展の巡回展を10万人規模の地方都市で催す異例の機会が今年は失われた◆戦前までは文展、帝展と呼ばれた。近代彫刻の扉を開いた穂高生まれの荻原碌山は明治41（1908）年の第2回文展に《女の胴》《坑夫》《文覚》を出品。第3回で3等賞を取った《北條虎吉像》は後に《女》とともに重要文化財になった。財団の長崎大幸理事長に言わせると「112年前から日展は安曇野を知っていた」◆北穂高出身の漆芸家・高橋節郎さんは26歳で初入選して以来、92歳で亡くなる前の年まで出品を毎年欠かさず続け、日展顧問も務めた。持ち回りや一時の幸運でなく、芸術の土壌と水脈が受け継がれている安曇野だから開催地に選ばれたのだ◆絵本美術館・森のおうち（穂高有明）の酒井倫子館長から「こんなときだからこそ芸術や文化をお届けしたい」と熱い思いを伺ったばかりだった。臨時休館の告知に言葉もない。好ましい例えではないが、一騎当千の侍大将が次々と敵の矢に倒れるのを目の当たりにした雑兵の心境だ。